つどいの広場「梅光ほっとみーる」の現状と課題

今村方子・肥塚陽子

要　旨

平成17年（2005）梅光学院大学子ども学部創設とともに、教育実践センターの機能を持つ学部付属の教育機関として、梅光多世代交流支援センターが設置された。子育て支援やボランティアネットワークの構築と情報発信を中心事業として活動する機関として、また、子ども学部の授業実践の場としても活用し、大学と付属施設と地域との連携を模索する中核的機関としての役割を期待され今日に至っている。平成19年（2007）よりそれまでの子育て支援事業が評価され、下関市より指定を受けたつどいの広場「ほっとみーる」が開所され、現在月平均30組を超す親子の利用者がある広場である。しかしながら、人的・経済的諸問題などが解消しておらず、課題が山積みである。本稿は、今後の展望を構想するに当たり、まず、その設立と事業内容、特色などを鑑みながら大学付属機関としての子育て支援事業の現状と課題について考察しようとするものである。

キーワード：つどいの広場，子育て支援，居場所づくり，地域連携

はじめに

平成17年（2005）に学生の教育機関として設置された梅光多世代交流支援センターは、“「大学力」を積極的に発信し、地域において世代を超えた人のつながりを作りだすことを目指している。当センター内に設置したつどいの広場「梅光ほっとみーる」は、子育て支援やボランティアネットワークの構築と情報発信を行っています。また、子ども学部の授業実践の場としても運営されています。”[1] とあるように、大学と付属施設と地域との連携を模索する中核的機関としての役割を期待されて今日に至っている。しかしながら、人的・経済的諸問題などが解消しておらず、平成21年現在はその中心的事業は子育て支援事業「梅光ほっとみーる」である。

本稿は、その設立と事業内容、特色などを鑑みながら大学付属機関としての子育て支援事業の現状と課題について考察したものである。

なお、「梅光ほっとみーる」の現状報告については主として肥塚が担当し、問題点・課題については肥塚・今村において共同執筆した。

1．つどいの広場「梅光ほっとみーる」の始まり

つどいの広場「梅光ほっとみーる」は、平成17年子ども学部の設立から3年目に始まった。それまで行ってきた子育て支援を基盤に、つどいの広場事業として下関市から補助を受け、親子の居場所作りのために多世代交流支援センターで、子育て支援を行って来ている。

以下は事業趣旨と規約の一部である。[2)]

（趣旨）

第1条　子育て家庭の親とその子ども（以下「子育て親子」という。）に対する地域に根ざした子育て支援活動を行う。

（事業）

第2条　本会は、梅光学院大学子ども学部及び地域の有志の協力を得て、前条の目的達成のために、次の事業を行う。

（1）　子育て親子たちの相互交流及び子育て支援

（2）　育児相談

（3）　学習会・講演会の開催

（4）　子育て環境の向上を図るための地域支援活動

（5）　子育てネットワークの活用及び子育て支援情報の収集・提供

（6）　子育て支援活動に係る学生の養成

（7）　機関誌の発行

現代社会の子育ての現状を眺望すると、3歳未満児を抱える家庭の約8割が在宅の子育てであり、地域の希薄化や核家族化によって、その負担のほとんどが母親にかかる。子どもを産んで初めて子どもと関わる母親も少なくない。また、転勤などにより、頼るところがなければ、何をするにしても不安は募っていく。そんな中で、つどいの広場事業は在宅の母親の居場所作りとして始められた。子育て支援センターはたくさんあるが、「いつでも誰でもいける場所」であり、3歳未満児が安心して遊べる場所としては未だ不足が多い中、下関でもひろば事業の開拓が行われ民間としては初めてその事業を手がけることになった。

当初、学生・幼稚園・地域とのつながりのために作られた梅光多世代交流支援センターがその場所として提供され、これまでの子育て支援体制を作り直し、つどいの広場事業として出来ることを模索した。

つどいの広場では、①親子の居場所の提供②育児相談③子育て情報の提供④講習会の実施を行うことまた、10名以上が利用できる場所であり、週5日・5時間以上開放することが義務付けられている。それらの条件を整えて、平成19年4月につどいの広場「梅光ほっとみーる」が発足した。「梅光ほっとみーる」では、子どもを真ん中にして“親育ち”“子育ち”“とも育ち”を掲げ、子どもの成長をより多くの大人が温かく見守る場所作りを試みている。

2．利用状況について

今年、登録者数は600組を超えた。登録は、初めて来た時に必要事項を記入してもらうだけである。そのために、1回のみで終わる親子、毎日のように来所する親子など、それぞれが「いつでも誰でも」の安心感の中で必要に応じて利用している。利用者は、生後1ヶ月からで、その多くは、兄弟児が利用していた場合が多い（図1参照）。利用状況から見て、乳児を連れての外出は控えたいと思うが、兄弟がいれば外での遊び場が必要となるということからその居場所の不足が見て取れる。年間を通して利用する親子は、この場所で他の子と揉まれながら成長していく。ハイハイする子の傍を3歳の子が通り、動きまわる子を、小さい子が見つめ、時に寝ている子をベットの傍で笑顔で眺めている子もいる。また、遊び方を知らず、ぶつかってしまったり、突き飛ばしてしまったりすることもあるが、共に経験となり親同士もその対応をしながら笑顔でそれを受け入れる。

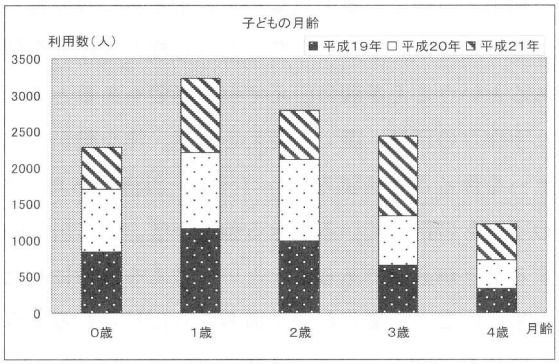


図1　利用者年齢（H21.11.30）

ほっとみーるを利用する親子は、友人などの紹介で来ることが多い。利用者が利用者を増やし、口コミで広まっている。また、どちらかといえば、人付き合いの苦手な母親が多いように感じる。黙って子どもと一緒に遊び、帰る。ほんの一言二言会話をするだけで帰ることもある。そして、また遊びに来る。家では家事やしつけなど子どもと関わりながら、主婦として母親としてまた、妻として様々な仕事をこなさなければならない、そのために子どもとの関わりは後回しになり、親も子もそのストレスは大きい。ここでは、それら全てを取り除き楽しんでいる姿を見て、子どもと遊ぶ場所として選んでいるのだと感じた。

子どもの成長と共に、子どもが友達と関わろうとする。そしてようやく母親も人との関わりを考えるようになる。ここは、子どもの成長と親の成長が見える居場所としての役割も果たしている。子どもは、これから人間関係作りを始め、母親は子どもを通しての人間関係作りを始める。互いに新しいコミュニケーションを作り出していかなければならないということでは、子どもも親も成長していくことが、これから社会の中で生活するために必要なことである。

3．居場所づくりの工夫

初年度は、居場所としての充実のため、環境づくりに専念する。室内環境はもとより、人的環境、広報、様々な状態をシュミレーションした室内配置など、試行錯誤で行う。3歳未満児は、全てにおいて未熟であり、全てにおいて吸収する時期の子どもたちである。子どもたちの成長は

著しく、室内環境においてそれをどこまで配置することが出来るかが最大の課題であった。安全管理を重視すれば、子どもの遊びは不足し、室内は騒然となる。遊びを重視すれば、様々な支障（怪我、誤飲、トラブルなど）が生まれる。

利用する親子の姿を見ながら、子どもたちの育ちの遅れ（幼稚・不器用・情緒不安など）が気になり始めた。子どもたちはもっと様々な経験を積み、小さいながら、たくさんの出来ることがあるということを親に伝えていく必要もあると考えるようになった。それを踏まえ、年齢にあった手作りの玩具、誰でも使える玩具、体を動かすための遊具、指先を使った玩具など様々なコーナーを作ることを試みた。コーナー設置にあたっては、以前、共感を受けた相良(1985, 1990)[3]の子どもの持っている生きる強さ、学ぶ力に目を向けて、子どもが自分で出来るために何を準備することが必要であることという考えを参考にした。その結果、子どもたちが真剣に遊ぶ姿や、出来ないことを楽しむ姿があちこちに見られるようになったが、その反面、親の口出しが気になり始めた。親は、子どもたちに遊ぶ方法を伝えようとする。子どもたちはその方法を知ることで、間違った経験を積むことができなくなる。一つの事ができれば、子どもより先に喜び、子どもは自分で実感することなく別の遊びに行く。そうすれば、集中力も身につかない。しつけに関しても同様な事が言える。

これらの理由から居場所作りと平行して、母親との関わりを考えるようにした。それぞれの状況の中で、マニュアルではなく子どもの成長を見ながら母親に言葉をかけるようにする。子どもの育ちが一番の喜びであることを頭に入れておけば、親は子どもにとって何がいいのかを考えるようになる。親は、子どもと共にいることが苦痛なのではなく、子どものためにいいことをいつも探しているのである。

4．育児相談から見えるもの

居場所の利用が増え始めると相談件数も増えていく。主にしつけや遊びについての相談が多い。0歳児は生活（授乳・夜泣き・離乳食など）が多く、1歳児は遊びが多い（動き回る・危ない）。2歳を過ぎれば人間関係（友達作り・けんかなど）へと相談は変化していく。中でも、人間関係には、かなり過敏になっており、子どもはけんかが出来ない状況にある。幼児期は体で全てのことを覚えていく。親が口でいくら言ってもそれは身につくものではなく、子どもたちは自分を主張し、周囲にいる子に興味を持ち、関わろうとする。一緒に遊んだり、おもちゃを取り合ったりする中で、たくさんのことを学ぶということは当たり前のことであるが、親の中でそれが大きな不安になっているように感じる。

今の子どもたちは、キレやすい。失敗を恐れる。自分から何もできない。などといわれる。幼稚園・小学校などでいじめが存在し、大人はその対応に苦しまなくてはならない。

子どもたちの世界は、大人以上に残酷であり常識がない。経験の少ない子ほどそれは尾を引く。1歳を過ぎれば友達と仲良く遊ぶ方法を教え込まれ、トラブルにならないよう大人が口を出す。2歳になると、ものの貸し借りを教えられ、自分が使っているものも我慢して貸さなくては

ならない。3歳になれば、「良い言葉」を教えられる。悪い言葉を使ったとき、その子は親に認めて貰えないので、親の顔色を見ながら言葉を選ばなければならない。

子どもたちは、人と関わるのにとても気を使わなくてはならなくなった。しかし、それは母親自身も同じである。子どもが思い通りにならなくなった頃から、子育ての失敗が頭によぎる。もし、自分の子が人を傷つける人間になったらどうしよう。私の育て方が悪いから。と子どもの育ちは母親にとって、社会の評価につながっているのである。母親は、周囲との関わりに不安を持つ。人付き合いが苦手に見えるのもこれらの原因が背景にあるのではないかとも思う。今の親世代もまた、核家族世代であり、少子化や地域の希薄化の中で育っている世代となった。人付き合いをするために必要なノウハウは、周囲との比較によって行われ、自分の子を守るために虚勢を張って良い母親でなくてはならない。そうなれば、子どもが良い子であることは絶対条件である。家庭の中で、母親は子どもを管理し、監視しておかなければ、社会の中で生きていかれないのではないかと感じている。

もし、それでも子どもが思い通りにならなければ、子どもをあきらめてしまうしか方法がないのかも知れない。子どもを自由（放任）にし、親は自分の時間を大切にする。子どもにかける愛情を忘れてしまったかのように。こうなると今の子の育ちは、それぞれの家庭環境だけを問題視するわけにはいかないのではないだろうか。

利用者も増え、リピーターも増えていく。その中で、母親同士のつながりも密になっていった。母親同士のつながりは、時に居場所をダメにすることがある。子どもを見ないために、トラブルや落ち着かない室内になってしまう。ほっとみーるでは始まった当初から、あったかい居場所を念頭に置いているため、利用者同士のかかわりには常に目を向けていた。そうすることによって、母親は子どもに目を向け、子どもが困っているときに傍に行き遊ぶのである。また、自分の子だけではなく、他の子と遊び、声をかけ、泣く子をあやす姿が自然に見られている。利用者がそのような意識を持つことで、新しい人々もそれに習い、子どもと関わりながらの母親同士のつながりを作っていけるようになった。また、年齢が上がると共に、親は子どもとの距離を置くようになっている。これらの状況の中で、育児相談の内容も変化していく。こちらが答えを出すのではなく、母親自身が答えを探り寄せてくる。ほんの一部分のアドバイスがあれば、それに気づき自分の子育てを考えていけるようになりつつある。「私がしっかりしなければ」という思いから、「今のままでいい」という思いへの変化によって、母親は肩の力を抜き子どもと関われるようになるのだと考えている。

5．母親の意識改革

1年を過ぎて環境づくりの基盤が出来始めた頃、母親の意識改革のための勉強会を始めた。育児相談で見える内容を項目別に分け（資料2）、この時期の母親が何を求めているのか。また、現代社会の中で、ありとあらゆる情報がすぐに手に入る時代の中にいて、子育て不安になる原因は何か、乳幼児期のみではなく、子育て全般に目を向け現代の社会背景の中で子育てを行う母親

表1　育児相談にみる相談内容

相談項目	種類	1位	2位	3位
しつけ	食事	母乳・離乳・断乳	マナー	アレルギー
	排泄	トイレトレーニング	便秘	
	睡眠	睡眠リズム	睡眠時間	夜泣き
	健康	病気	怪我	病院
	その他			
人間関係	友達（子）	友達作り（子）	けんか・トラブル	兄弟
	親同士の問題	ママ友	苦手	
	家族間の問題	父親	夫婦間	祖父母
	その他	近隣		
性　格	行動	人見知り	粗暴	反抗期
	癖	指吸い	爪噛み	
	障がい	不安		
	その他			
集団生活	幼稚園	幼稚園選び	不安	不満
	保育所	保育所選び	不安	不満
	その他	教師		
母　親	子育て不安	自信がない	協力者	わからない
	母親の問題	人付き合い		
	仕事	職場復帰	両立	
	その他			
その他	育児方法			

が、子どもとどう向き合っていけるかを考えていかなければならないのではないかと思う。

勉強会では、今目の前の子どもの状態について話を進めながら、しつけ・遊び・教育・などの、子育ての方法に気づき、子どもの成長発達について学び、親として何が必要であるかを考える場としている。普段母親同士では話さない内容を、他の母親と一緒に学ぶ中でそれぞれが気づき話をする。子育てと向き合うことを目的に今後も発展させていければ良いと考えている。

6．現在のプログラムとその課題

3年目を過ぎようとしている今年、ボランティア育成も始まった。母親の意識の改革がどの方向に向かっていくか、今後も慎重に検討していかなくてはならない。

なお、ここでこれまでの「梅光ほっとみーる」で展開してきた事業について整理しておきたい。図2「孤立から個立をめざすプログラム」に見られるような階層で、この3年間を駆け上がってきた。それぞれの段階を振り返り、その時その時での保育士の関わりを振り返り、認識し直し、今後さらなる支援技術の向上を図りたいと考えている。

【居場所づくり】

・目的：親子が集える居場所づくり

・開所状況：平日5日　5時間開放　会費無料

・留意事項：あったかい雰囲気の居場所づくり、親育ち・子育ち・共育ち、利用者が利用しやすい居場所を作る。

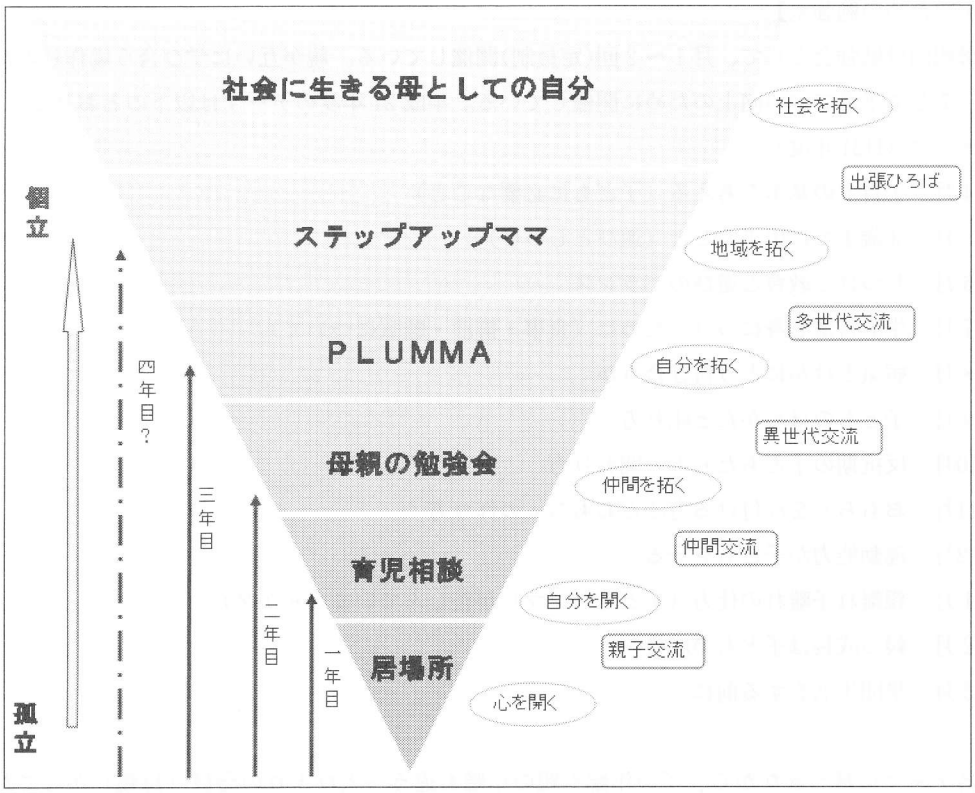


図２　孤立から個立をめざすプログラム

親子で過ごす居心地の良い場所が、自然な親子交流を生み、それが一組一組の親子の心の交流を開く営みにつながるように心がけて援助している。

【育児相談】[4)]

・留意事項：一人ひとりの親の状況や事情により以下のことを心がけている。

①ただ聞く。

②プライバシーを守る。

③話を聞きながら、他のお母さんの意見を聞き、参考にしてもらう。

④子どもと関わりながら、その子、その家庭に合った子育て方法などをアドバイスする。

⑤話の内容により、先輩ママにつなげる。

⑥他機関へつながる情報を伝える。

⑦母親自身が出す答えを待つ。

一人ひとりの母親との関係づくりから始め、まず無条件に「聴く」ことから心がけ、母親が自然に自分を開いていけるように支援している。受け入れてもらえた体験は自分を開いて仲間と交流できる自分へのステップアップにつながると考えている。

【母のための勉強室】

母親向け勉強会として、月1～2回(定員制)開催している。親が互いに学び合う場作りのために、そして子育て力の向上のために開催している。平成21年度のテーマは以下のとおりである。

テーマ（H21年度）

4月　子育ての基本を考える（子どもに必要なこと）
5月　3歳までに出来ること（遊びとしつけ）
6月　しつけと教育と遊びのバランス
7月　生活習慣を身につけるために（食事・排泄・睡眠について）
8月　病気とけがにどう付き合うか
9月　子どものほめかたと叱り方
10月　反抗期の子どもたちとの関わり方
11月　おもちゃを片付ける方法とおもちゃの作り方
12月　運動能力が子どもを守る
1月　親離れ子離れの仕方（子ども（ママ）が苦しんでいませんか？）
2月　親の成長は子どもの成長
3月　集団生活をする前に

各テーマに基づきながら、子の年齢も親の年齢も違う一人ひとりの会員（母親）からでた意見・感想や提案などについて、保育士が会員に紹介しながら聞き取り記録していく方法をとり、会員相互の共通知識や情報としていくように心がけている。そうすることによって、他者と交流する楽しさや充実感が生まれ、進んで他者と関わろうとする気持ち（仲間交流）が生じてくると考えている。

【PLUMMA】

平成21年度にたち上げた事業で、母親によるイベント企画やボランティアの育成をめざしたものである。現在の活動内容は、以下の通り。

①「世界の子どもたちにワクチンを」ペットボトルキャップの回収
②食育を学ぶ　稲の育ちから稲刈りまで　おにぎり作り
③PLUMMA通信の発行　毎月1回
④下関手作りマップ作り（市民活動支援補助金事業）

事業PLUMMAは、現代社会で取り上げられている様々のトピックについて、母親の視点で考え行動する、つまり、現代社会において母親の立場としての役割を果たすには、どのようなことができるかを協議し行動する母親となることを意図した事業である。本事業を通して、現代社会に生きる子を持つ母親として、たくましく自分を拓く精神を培い、多世代交流をもいとわない力量向上をめざしている。

【ステップアップママ】

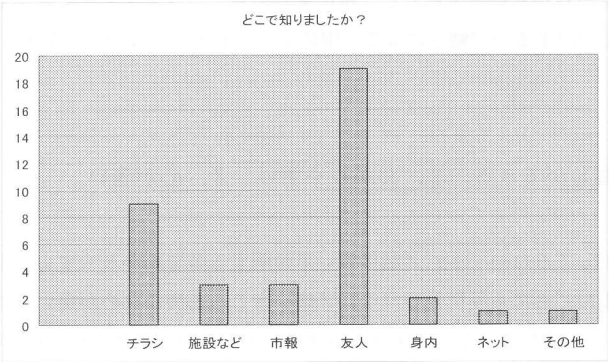
平成22年度からの開設を予定している事業である。幼い子の子育てを終了した親たちでつくる事業として、他の広場などに出向き、自己の体験を生かした情報や活動の提供をとおしてさらなる社会人としての役割に目覚め行動する主体をめざしている。

以上の実践についての母親のアンケート調査の結果を紹介しておきたい。
アンケート内容は文末資料1を参考にされたい。

- アンケート実施日時：平成21年10月
- アンケート対象人数：30人
- アンケート項目とその結果（重複回答あり）

①どこで知りましたか？

1．友人　2．チラシ．3市報



②利用し始めてどれくらいたちましたか？

1．2年以上　2．1年未満　3．2年未満

③初めて来た感想は？

1．手作りおもちゃ　2．あったかい雰囲気　3．広い

（その他の意見）

近いので便利（6）／駐車場が広い（6）／良い（4）／駐車場があって静か（4）／駐車場が幼稚園のお迎えのときは停めにくい（2）／利用しやすい（2）／室内が広い（2）／入り口がわかりづらい（2）／幼稚園の子どもたちの姿が見れて刺激がある（1）／大通りから外れているので渋滞しなくて便利（1）／車の通りが少なくて安心（1）／友達がたくさんいるので楽しい（1）／毎日来たがる（1）／公共機関が使える便利な場所だと助かる（1）／幼稚園行事に参加できる（1）／0歳が遊べる（1）／お弁当がゆっくり食べられる（1）／

④育児相談について

1．相談しやすい　2．気持ちが楽になる　3．会話の中で解決ができる

（その他の意見）
子どものことをよくわかっているので相談しやすい（4）／色々話せて参考になる（4）／教えてもらえるので助かる（4）／会話の中で解決できるので相談しやすい（3）／会話の中で悩みや不安が話せて気持ちが楽になる（2）／気軽に相談できる（2）／困ったときにいつでも相談できる（1）／随時相談にのってもらえる（1）／今後利用したい（1）／納得できる答えが返ってくる（1）／頼りにしている（1）／いつでも相談でき悩みを抱え続けることがないのでありがたい（1）／丁寧に教えてもらえるのでありがたい（1）／アドバイスがもらえるので感謝している（1）

⑤育児講座について

1．参考になる　2．とても楽しみにしている　3．大学の先生の話が聞ける

（その他の意見）
専門の先生の話を聞けていつもと違った時間が持てるので楽しい／良い／自分に出来ない体験が出来るので楽しい／中々講座を聞くことがないので楽しみにしている／今後利用したい／子どもが楽しく遊んだりするので、気分転換になる／テーマがはっきりしているのでリアルタイムなものに参加している／日ごろの育児の参考にしている／大変ありがたい／子どもと一緒に楽しめる／バラエティーに富んでいて楽しい／大学の先生に会って直接はなしが出来るので勉強になる／申込をしても来られないことが多く残念

⑥勉強会について

1．子育ての見直しができる　2．わかりやすい　3．心が痛い

（その他の意見）
勉強になる（6）／参加してみたい（2）／紙に書いて説明するのでわかりやすい（1）／子どもの様子を見ながら勉強できる（1）／とても役にたつ（1）／痛いところを突かれ心が痛い（1）／反省させられる（1）／日々の育児でとても助かる（1）／テーマが決まっているので参加しやすい（1）／よい企画（1）／自分で色々考えられる（1）／普段の生活の参考になる（1）／一つでも実践できればと思う（1）／自分自身を見直すきっかけになる（1）／実際に悩んでいることなので役に立つ（1）／自分だけが悩んでいるのではないと思える（1）／自分自身が成長できる大切な機会（1）／

⑦PLUMMA

1．企画が楽しい　2．尊敬する　3．励まされる

（その他の意見）
楽しい企画で参加している（3）／ボランティア活動をする人を尊敬する（2）／母親同士のつながりを考えることができる（1）／多くの人に知ってもらって参加してもらいたい（1）／ママの会があるのは良いこと（1）／メンバーが増えるといい（1）／楽しそうだけど、一人で入るのは入りづらい（1）／ママたちのがんばってる姿に励まされる（1）／ボランティアをサポートしているほっとみーるもすごいと思う（1）／身近な存在（1）／とても良い試みだと思う（1）／入りたいと思っているが余裕がない（1）／楽しく活動している（1）／楽しい企画をしていきたい（1）

⑧「梅光ほっとみーる」に期待すること

今のまま（6）／ホッとできる場所であり続けてほしい（4）／閉鎖されないこと（4）／預かり保育

（3）／安らぎの場所であってほしい（1）／色んなことを教わりたい（1）／スタッフが辞めないこと（1）／参加型の行事を増やしてほしい（1）／多世代の人との関わり（1）／外遊びが出来る場所があったらいい（1）／利用時間の延長（1）／母親が自信を持って育児が出来るような企画（1）／曜日を決めて子どもたちが喜ぶことをしてほしい（1）／講座などに参加できないので資料がほしい（1）／子どもが大きくなっても参加できる勉強会や講座（1）／第2のふるさと（1）

以上、「梅光ほっとみーる」における自立する母親育成プログラムの構造及び実践概要と参加者アンケート結果を紹介してきた。今後、本プログラムのさらなる実践と検証を積み重ね、母親支援のあり方を構築していきたいと考えている。

おわりに

ほっとみーるは、子育ての始まりの段階であり、母親はこれからより複雑な世の中で子育てを続けていくことになる。今現在の気持ちを忘れることなく、地域の中で子育てを考える仲間や、地域の人に目を向けていけるために何をすればいいのか。

子育ての現場では、日々様々な子どもの姿が見える。来所する子どもの親は、母親だけではなく、父親であったり祖父母であったり、近隣の人であったりしても何も問題はない。そして、支援者がいなくても地域の中で自分たちの居場所を作ることが本来の姿である。子どもが安心して遊べ、母親が安心して見守り、子どもが育ちやすい社会になるためにできることを多くの人が考えていくことが出来るためには、まだまだ大きな課題が残っている。

今後支援者として、子どもと向き合う母親を理解し、それぞれに合った方法を様々な視点から見つけていけるだけの資質や技術が必要になる。子どもの発達、親の思い、それを取り巻く周囲の状況など常に心を配っていかなくてはならない。支援者が答えを出すのではなく、母親自身が自分の子育てに自信を持ち、子どもとの関わりを楽しみながら子どもの成長をより多くの人と一緒に見守っていけるために出来ることを考えていきたいと思う。

梅光多世代交流支援センターとしての「梅光ほっとみーる」の役割の明確化や大学との連携、他の付属機関との連携のあり方等々課題はまだ山積みである。

注

1　梅光多世代交流支援センターホームページ掲載記事より引用。

2　梅光ほっとみーる規約より。

3　相良敦子「ママ、ひとりでするの手伝ってね」講談社 1985、相良敦子「子どもは動きながら学ぶ」講談社 1990

4　「梅光ほっとみーる」では、梅光学院大学子ども学部教員による月1回程度（1～1時間半程度）の「育児講座」も実施している。ここでは扱わないが、母親を対象とした講座型、親子の育ちを中心とした体験型などがある。表2参照。

資料1　「梅光ほっとみーる」参加者アンケート

＊初めてほっとみーるに来られてからどのくらい経ちましたか？ だいたい　　年　　ヶ月
＊つれて来られているお子様の年齢は何歳であるか？ ①　　年　　カ月　②　　年　　カ月　③　　年　　カ月　④　　年　　カ月
＊ほっとみーるを知ったのはどこであるか？ チラシ・施設（支援センターなど）・友人・身内・インターネット その他（　　）
＊初めてほっとみーるに入ったときの様子はどうでしたか？
＊現在、ほっとみーるを利用していてどう思いますか？ 1.　場所について： 2.　育児相談について： 3.　育児講座について： 4.　母のための勉強室について： 5.　PLUMMA について：
＊今後、ほっとみーるに何を期待していますか？
＊子育てに必要なものは何だと考えていますか？　1位から5位まであげてください。 ①　　②　　③　　④　　⑤
＊今子育てをしていて、困っていることは何であるか？

表2　育児講座一覧（H 21年度）

回	実施時期	名　　称	担　当	形態	概　　要
1	4月	オリエンテーション	肥塚陽子	講義	H21年度育児講座計画の紹介と意義・目的について
2	5月	ほっとみーるのこれまで、そしてこれから	今村方子（伊藤敦子）	演習	幼い子どもをもつ親や家庭の支援の歴史と現代的課題を探る（参加者とディベート）
3	6月	心を育てるあそびうた	今村方子	演習	親子であそび歌を楽しみながらその意義・目的を考える
4	7月	親子で楽しく体操教室	林　俊雄	実技	親子で手軽に一緒に楽しめるレクダンスやマット遊びを体験します。
5	10月	身近な素材で創造力をつける	田村　務	演習	＜新＞新聞紙遊び③棒作り
6	11月	子どもの心と体	徳永幸枝	講演	子どもの体や心の発達がいかに歪められているかいろいろな例から考えます。
7	12月	遊びの発達	藤木大介	講演	子どもの遊びにはどのような発達の意味があるのか
8	1月	「この子」と社会を繋ぐ子ども理解	杉山直子	講演	「わが子の専門家」となるために、保護者として、子どもをどのように読み取っていくのかについて
9	2月	四世代交流	吉島豊録	演習	高齢者・学生・教員とのふれあいを通じて、世代間で伝えるモノ、伝わるモノを体感します。
10	3月	多世代交流とは何か	黒田敏夫	演習	多世代の参加者一同がともに活動する中で育まれるものについて